

いなかづみ

令和三年九月 第八六号

- ◇ 村の景観と歴史・人物(5)
- ◇ 民具が語る生活史(民具⑬フカシド)
- ◇ 方言一考(げっぼ)
- ◇ モノ言うもの(関谷学園資料③)
- ◇ 歴史館行事の報告・お知らせ

村の景観と歴史・人物(5)

上関番所と清水家の墓と門前家

渡辺 伸 栄

関川村発祥の地はどこか、ご存じでしょうか。

全国各地の「関」地名は、関所が元になっています。名刀・関の孫六の関市、天下分け目の関ヶ原、関門海峡の下関市、皆そうです。私の住んでいる上関にも、関所がありました。関所のある地が「関」です。その下手にできた村が発展して関下、下関と呼ばれ、い

つしか上手の村は上関と呼ばれるようになりました。

かつて、下関へ行くことを近在では関へ行くと言ったものですが、私など、今でも旧荒川町の古い人たちから「関の衆(しよ)」などと言われます。上下両関合わせて関の地で、明治になって関村となり、その後、関谷村となって現在の関川村まで関の地名が続いています。

上関に、ずっと昔、鎌倉幕府以前に置かれた関所が「桂の関」で、それが、道の駅の名称になっています。その後、三瀧氏の城が関所の役目を果たし、江戸時代には番所が置かれました。幕府は地方の関所を「番所」と呼ばせたのです。

上関番所のトップは清水氏。「関川村史」に、清水氏代々の墓が上関安養寺境内にあるとあって(五六〇頁)、以前、ご任職に尋ねたことがあります。どこにもそれらしきものはなく檀家にもいないということでした。それが、去年の夏のことです。ひよんなことから、その墓が見つかったのです。

お盆前の墓掃除をしていると、近所の渡辺清さん夫妻が思わぬ場所で墓掃除をしています。どこの墓を?と尋ねたら、よその墓地だけで昔から代々自分の家で管理していて、「清水様の墓」と伝わっていると言います。

親が若かった頃は礼状も来ていたようだけど、近年はそれも絶えた。

ぴんと来ました。スマホで撮って、帰宅して「村史」の記述と照合すると、ピタリ一致しました。一基に刻まれた「浄蓮院清蒼西進居士」の文字は、六代清水近右衛門政経の戒名。もう一基の「文久二戌年十月十一日卒」の碑文については、「九代近右衛門政益は水原代官とともに江戸出張中、文久二年十月病没」と「村史」にありました。

安養寺境内ではなく、上関の共同墓地の一角にあったのです。貴重な文化財です。写真①

ではなぜ渡辺清さんの家で代々、清水家の墓を守ってきたのでしょうか。

実は、清さんの家と私の家は、国道バイパスができる前は、現在の丸重商店さんの前の国道交差点の真ん中に宅地が並んでありました。

我家は明治後期に、新道といわれたその地に



<写真①>

家を持ちました。渡辺清さんの家は、元々は安養寺の前辺りにあったのが、米坂線の工事に引っかけたって我家の並びに移ってきたといわれていました。それで、屋号は「門前（もんぜん）」というのだと。

ところで、丸重商店は、今の位置よりも少し上手で、安養寺の前から踏切を越えてまっすぐ下ってくる坂の正面にありました。今は痕跡のようになっていてその坂は「大門坂（だいもんさか）」と呼ばれ、「門前」家同様、寺の門の前の坂だからと思われるしていました。しかし、今回の件で、これらは少し違うのかも知れません。

「村史」五六一頁に江戸時代の上関宿と番所の位置を示した図面が載っています。それと現在の空撮写真を合わせたのが「写真②」です。

共同浴場の前の通りが、当時の宿場道で、そこをまっすぐ南へ進むと番所に突き当たります。番所は高台にあるので、当然、坂を登ります。そして番所入口には、権威を示すため一般に冠木門が置かれます。二本の門柱に横桁を貫き渡した門、これが大門です。

大門坂が番所の大門の前の坂であれば、「門前」家も大門の前にあった家ということが十分考えられます。番所のトップ清水家の墓の管理を委ねられたとすれば、門前家は番

所に関わる仕事をしていたとも考えられます。

明治になって番所は廃止、番所前にあった門前家に代々の墓の管理を託して、清水家は上関を離れた。昭和になる頃、米坂線が通ることになって、門前家は元の場所を離れ、大門坂は安養寺の前に移動した。いつしか人々の意識から番所のことには消えていった。にもかかわらず門前家は誠実に百五十数年、変わらず清水家との約束を果たし続けた。

こういうことになるのではないのでしょうか。歴史の深さを感じませんか。



民具が語る生活史

民具⑬ フカシド(蒸し器)



歴史館の収蔵庫に寄贈していただいた「蒸し器」があります。赤飯専用で使われていたそうで、へらと蒸し布付きです。いわゆる蒸し器には、蒸籠(せいろう、せいろう)・甑(こしき)・ステンレス製・金属製の蒸し器など、様々な種類がありますが、今回いただいた蒸し器は「蒸籠」の仲間になります。

蒸籠は、円形の枠に竹や杉、檜(ひのき)などの木を編み込んだ容器にあたる身と、蓋の部分がセットとなるのが基本の形で、角蒸籠のように四角形の場合もあります。沸騰した湯の入った鍋などの上に置き、内部に加熱された水蒸気を通すことで食材を加熱調理する調理器具です。蒸籠と聞くと中華料理を思い浮かべる方も多いのではないかと思います。中華蒸籠と和蒸籠があり、中華蒸籠は竹で編まれた底と蓋が一体になっているのに対し、和蒸籠は底の部分に着脱可能になっているものが多いようです。

「蒸し器」は、蒸籠タイプのもも、ステンレス製・金属製のものも、なぜか関川村では一律に「フカシド」と呼ばれます。「蒸かし(フカシ)ナド」だと思われるのですが、この下は一体何を指すのでしょうか。私が、「医者どのドはきつと殿(どの)から来ているけれど、蒸かし

方言一考・げっぼ

殿(どの)だとあまりにも変だし、まさか道具のドではないしなあ…ド、強調？」と悩んでいると、安久館長から、「竈(カマド)のドじゃない？」と鶴の一声が。そこで竈の語源を調べると、竈(かま)十処(ど)で、竈(かま)を載せる処(ところ)という意味でした。ここから考えると、フカシドは、蒸かし(ふかし)十処(ど)なのでしょう。なるほど、すつきりしました！

さて、このフカシドは、赤飯、笹巻(ちまき)、さつまいも、じゃがいもなどを蒸かすときに活躍します。中でも赤飯は、多くの家で、春や秋の彼岸、お盆の十五日、重陽(ちようよう)の節句、祭礼、各家での御祝い事、また葬式などに作られるものでした。

九月ですと重陽の節句と秋の彼岸がフカシドの出番でしょうか。重陽の節句は現在あまり顧みられなくなりましたが、そもそもは五節句の一つで、九月九日、菊の節句とも呼ばれます。五節句は、宮廷で節会(せちえ)と呼ばれる様々な節句が存在していた中から、江戸幕府が公的な行事・祝日として定めた五つをいいます。重陽の他には、人日(じんじつ)、一月七日)、上巳(じょうし)、三月三日)、端午(たんど)、五月五日)、七夕(たなばた)、七月七日)があります。「重陽」とは、陰陽思想では奇数は陽の数であり、陽数の極である九が重なる日であることに由来します。この日、邪気を払い長寿を願って菊

の花を飾ったり、菊の花びらを浮かべた酒を酌み交わしたりしました。上田秋成の「菊花の約(ちざり)」(『雨月物語』)では、重陽の節句が重要な約束の日として物語を成立させます。渡辺三左衛門家が勧農金のお礼に米沢藩からいただいた拵(こしらえ)も五節句の装飾で、こちらもいざれご紹介したいと思います。

フカシドの話に戻ると、全国的には驚かれることもある習俗ですが、関川村では葬式に赤飯が付き物です。葬儀会社や仕出し屋さんが今のように発達する以前は、参列者への赤飯も親戚ですべて用意していました。往々にして騒ぎごととは急であり、赤飯を含む葬送儀礼に関する苦労話は今でも何うことが出来ます。このようなとき、大きいフカシド、二段重ねのフカシドは大変有益でした。「凶事にも赤飯を食べるのはなぜか」について、民俗学では多くの研究がなされています。こちらは紙面の都合上割愛しますが、民具と年中行事、民具と民俗語彙・方言の関係は大変興味深いです。

秋は食べ物がとりわけおいしい気がします。栗、かぼちゃ、あけび、さつまいも…。「初物を食べて七十五日長生きする」に習い、秋の味覚を楽しみ、疫病に負けないようにしましょう。

(田村 舞子)

参考文献

民具学会編一九九七「セイロウ(蒸籠)」『日本民具辞典』ぎょうせい出版

「げっぼ」というのは最下位、びり(尻↓しり↓びり)のことである。語源は「下方」と思われ、「げほう」が「げっぼ」に転化したようだ。こういう漢語的表現が関川の方言の中に残っている例を挙げると「恥ずかしい」の「しゅうしだ」は「笑止」(笑止千万の笑止)、「簡単だ」の「じょうさねえ」は「造作ない」(手間がかからず容易)、「大変な苦労だ」の「おつてぎだ」は、時代劇で殿様が部下の侍に「大儀である」という大儀で、これにさらに大を付けて強めたのが大儀である。死語となった古い言い方が方言の中に残る一例である。WK氏はこの夏の間中、新潟への夫人送迎の合間を縫って当館に通った。館には寄らず私の軽トラに乗り換えていずこかへ消える。噂では荒れ地を耕し花を植えているらしい。今年の夏は特に暑かった。そうかと思えば大雨になって天気も過酷であったけれど、損得を考えてやることではないらしい。彼の言動を観察する限り、学生の時大概ね「下方」辺りに甘んじざるを得ず、それを己の器と甘受して安穩としていたのだろうが、とっぱんずけで一流企業に入ってからは大儀であったわけで、人に言えないしうしな思っても沢山したろう。それを炎天下の作業同様「じょうさもねえ」というのが、彼の数少ない美点のひとつだ。(安久)

モノ言うもの・関谷学園資料③

敗戦による困窮と虚脱、そして混乱の中で新しい教育が模索される中、城戸幡太郎、佐藤仙一郎、渡辺萬寿太郎三人の奇跡的な出会いで当村に開園された関谷学園は戦後の新教育の象徴であり希望であったであろう。仙一郎は開園半年前から新教育に相応しい多種多様な人材を選びを始め、それに応じた履歴書の一部が残っている。履歴が書き記された種々の紙には計り知れない希望が自ずと読み取れる。

写真は開園当時の教職員の集合写真である。



前列向かって右から四人目が萬寿太郎、続いて新潟県知事佐藤基、城戸、そして仙一郎と並んでいる。城戸と仙一郎の後ろに立つ和服の女性は平成十三年に「関谷学園を偲ぶ」を著した石井中、三列目左端はのち画壇の重鎮となる小野末吉である。いずれの顔にも新しい教育に燃えた決意の表情が見える。後ろの看板には「SEKIDANI YOUNG MEN'S SCHOOL」「SEKINATIONAL SCHOOL」とあり、これにもまた当時の希望と意気込みが感じられるのである。(安)

歴史館行事の報告

○夏の美術館巡りへ石川雲蝶の作品を訪ねて②本成寺・石動神社 7月17日(土)、総勢38名



○良寛の歩いた峠を越えて③「桜峠・オノ頭峠、横川ダム周遊」9月25日(土)、総勢19名

○古文書解読講座(7月〜9月)、進捗状況・旅人は京都の名所に立ち寄りながら、越後へ向けて歩いています!

お知らせ・今後の行事の予定

○村民ギャラリー「伊藤航子日本画展」開催中!
岩絵の具を使った日本独特の絵画、日本画を長年趣味で描かれている伊藤航子さん(下川口)の作品展を開催しています。会期:9月18日(土)〜12月12日(日)、11月ころからの後期には何点か展示入替を行います。お楽しみに。

○歴史講座 関川村の文化財調査委員の佐藤忠良さんによる歴史講座です。10月21日(木)は「関川村が関わる災害の歴史その1」です。11月18日、12月2日と3回予定しています。村民会館会議室、20名募集、19時〜21時です。

○初心者のための秋登山「徳綱山(787m、小国町)」10月17日(日)、村民・友の会会員、無料、7時歴史館集合〜17時帰着です。

○秋の健康登山「高坪山縦走☆ブナの巨木!」10月30日(土)、村民無料、参加される村民の知人の方五百円、30名募集、7時歴史館集合〜17時帰着です。

○良寛の歩いた峠を越えて④10月23日(土)、「大久保峠、宇津峠」、村民・友の会会員無料、30名募集です。時間はまだ決まっていません。

○「関川村懐かし映像上映会 第1弾」として、一九六四年の村内を走る聖火リレーの映像をエントランスホールで放映しています。8ミリフィルムで記録された貴重な映像で、懐かしいあの建物、あの人が映っています。ぜひご覧ください。(11分間)

☆いずれの行事も広報せきかわで随時募集しています。どうぞよろしく願います。

いわかがみ 第八六号

発行日 令和三年九月

編集発行 せきかわ歴史とみちの館

tel10254-64-1288 Fax0254-64-0300